

創刊号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十一年一月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

明達光輝

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍した。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・柳歌・短歌・俳句・川柳）・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長
編集長

大西生一



目次

随筆……平成二十年十一月九日 小春日和 永井組若芽

俳句……絵本部屋 彩 華

随筆……義母へ 小川 悦子

随筆……僕と神戸 柴小路 秀磨

随筆……来ひーん物語 大西 生一朗

〔設立集会〕

柳歌……メタボの世紀 石川 柳歌

◆往復書簡―ご返事 明達 光輝

33 29 26 19 13 8 5 1

「エッセイ」

平成二十年十一月九日 小春日和

永井組若芽

りに帰省する息子を迎えに行つた帰り道のことだ。

和三盆糖の甘味が口の中でゆつくり

彼は中学のほぼ全てを不登校で過ごした。

溶けるように、ほわりとした幸せが体中に広がっていく。『もう少し寝たフリをしていよう』私は自動車の後部座席で夫と息子の会話に聞き耳を立てていた。

私はジタバタとあがいた。スケジュール帳はカウンセリング、講演会、不登校親の会、コーチングの勉強会等で埋まり、書籍は3段ボックスにいっぱいになった。焦

十一月。早い日没で車のライトがイルミネーションのように輝いている。三重県にある全寮制の高校から約2ヶ月ぶ

れば焦るほど、砂に胸まで埋まり身動き出来ないような感覚に陥つた。
「なんでや」

夫は学校に行かない理由、行けない理由を私に聞いた。

「そんなん、分かる訳ないやん」

事あるごとに不毛な会話は続いた。

夫は理性的だ。理論的な話は理解出来ても、人情の機微というのか、感情を推し量るといような事には疎い。何より息子の状況を認めたくなかったのだろう。

一方息子も、イライラした感情を母親の私にはぶつけるが、その原因や気持ちを言葉に出来なかつた。今も言葉にできるまでには、まだ達していないのだろ

う。この間のことは話題にはしない。

私とは言えば、おしゃべりは得意だが確信をついた話、結論を求めるといような話は苦手だ。まして話をしない相手に「聴く」という作業は至難の業。「家族で会話を」なんてどこかキレイごとのような感じさえする。まして心を伝えるのは難しい。

三年という年月は流れた。

そして今、四月に高校に入学して7ヶ月が過ぎ、徐々にではあるが確実に息子は成長している。

「やらされている」感は強いが、英検

準2級と漢字検定2級に合格した。中学1年の中間試験を受けたたつきの彼は、四苦八苦したに違いない。親は息子の人生に高校生活があつたことに感謝している。そして信じられないことに、家で『三年寝太郎』だったのに全寮制で生活している。それもなかなか楽しそうに。世の中には予想外のことがたくさんあるのだなあ、とつくづく思う。

車ではぼそつ、ぼそつと聞き取りにくい声が続いている。

今日の学校行事で取り組んできた演劇の話だ。実は演劇は不登校生に対す

るいわばリハビリプログラムなのだが、けっこうな量のセリフを覚え、三百人位入るホールで本格的な演技に挑戦したのだ。次は大学の話。三年生の先輩が受験真つ最中だ。見聞きすることも多く、学ぶことも多い。そして先日の模試の結果。今はどんな勉強に興味があるのかなど。

夫は国立大学が一期校、二期校だった時代の大学生。なのに「○○大学はこんな入試傾向がある」と、化石のような話をしている。私でさえ共通一次世代だ。今の制度を知っているのか？ 笑つ

てしまいそうになったがこらえた。

夫の声がうきうきしている。これから
はお父さんに、うんとがんばつてもらおう。
うまく会話が続かなくても、私はだ
まつているようにしましょう。ああ、これがと
ても骨の折れる作業なのだけれど。

高速道路から垂水の街の明かりがま
ぶしく輝く。明石大橋が見えてきた。明
石に帰つてきたと感じるポイントだ。

「やつぱり神戸は明るいな」と息子の
声も軽やかだ。

今回の帰省はわずか3日。好物だけ
を並べよう。私に出来るのはそんなこと

ぐらいだ。

もうすぐ家に到着だ。

さて、晩ごはんは何にしよう。



無料壁紙写真より

「俳句」

絵本部屋

彩

華

シクラメン開く天使ら飛び交つて

水仙のつぼみ膨らむ夢ふくらむ

親指姫隠れていそうなチューリップ

虹が見えた桜トンネルくぐつたら

ポピー咲けばバレリーナが踊りだす

パレットに出せないブルー濃紫陽花

弾きかけた楽譜をめくる薔薇の風

浜昼顔 背中にクロスの水着跡

露草に青空のしづく落ちている

フルフルツ真つ赤なコスモス微笑んだ

魔女になる芒の箒に乗ったなら

落ち葉の海ここが私の絵本部屋



「エッセイ」

義母へ

小川悦子

平成十七年二月の下旬、一人暮らしができなくなつた姑を迎えに主人と、実家のある島根県浜田市へと向かつた。生憎その日は前日から降つた雪で側道には雪が積もつていた。浜田市に通ずる高速道路ではチェーン規制、のろのろ運転でいつもより三時間もオーバーして到着した。翌日姑を乗せ、明石市に車を走らせた。車中、アルツハイマーの中

期を過ぎている人が、環境を大きく変えるとうなつていくのか、施設の生活に馴染めるのだろうかなど頭をよぎつた。心配していたとおり姑は、施設に着いたことを受け入れられず「家に帰る。」と言いだした。不安のあまり廊下を車椅子で徘徊し、食事をするこすら拒んだ。来る日も来る日も姑の元へ行き、少しでも気持ちを和らげ落ち着かせてあげたかつた。大変だつたが、行かなければの気持ちより、行ってあげたかつた。と

言うのも結婚する前に事情があつて、主人の実家で一緒に過ごしたことがあつたからだ。姑は純粋な人で、周囲の目を気にすることもなく私を受け入れ、ほんとに優しくしてくれていた。そのことが三十年の月日が経つた今でも、私には温かい思い出となつて残っていた。

何をすれば、どうしてあげたら気持ち元気になるのだろうと考えた末に、近くにあるスーパーに連れて行くことにした。今の事は覚えていられなくても、昔の記憶は残っているから畑で野菜作りをしていた人なので、野菜売り場で大

根や人参、ジャガイモなどを指差しながら当時の話をした。目に勢いがでて得意そうだった。それからというもののシヨツピングにはまり、好きな物や、買いたい物を一緒に選んだり、その中には夏には夏の生地洋服をという姑の希望も入っていた。嬉しかった。おしゃれ心を取り戻したのだ。だんだんと口数も多くなり生来の穏やかさが戻ってきた。自分から外出することを口にし、安心させてくれたのもこの頃だった。主人も張り切つて休日には海へ、自然公園へそして食事にと余念がなかつた。そんな折、医師より肝

臓がんの再発を告げられた。前向きに暮らしている今でなくても涙がこぼれる。しかし何も知らない姑は、私たちの気持ちとは裏腹にいつも明るい。介護度もそれにもなつてか、要介護度³から要介護度¹へと軽くなった。その事を新聞に投稿して掲載されたものを転記する。

.....

介護施設で姑は「しあわせ」と笑った。認知症の姑を県外から私たちの元へ引き取る際、介護施設への入所を決断した。今でも介護施設への入所について

は賛否両論がある。「家で世話をせず手抜き」「世間の目が気になる」「本人が可哀そう」と言ったイメージがつきまといつているのか。しかし、我が家は住宅事情もあり、入所を選択した。実際に入所してみると、姑の身体機能は著しく改善された。栄養管理、生活面での規則正しさ、リハビリの効果だろう。ほぼ一日中、ベッドで寝たり起きたりだけの毎日を繰り返していた人が、外出することを喜ぶようになった。生活に張りがでてきたのだろう。今、「本当によかった」と胸をなでおろしている。施設でお世話

していただいている職員さんに、感謝の気持ちでいっぱいだ。何がいいかは誰が決めるのか？それは姑自身だと思う。先日も「私はしあわせ。みなさんによくしてもらって」とにっこり笑ってくれた。

以上

.....

姑を明石に引き取る前の不安、移り住んでからの困惑が嘘のように消えた。肝臓がんの再発さえなければすべてが順調だった。

新しい年を迎えお正月気分もぬけた頃、担当医より呼び出しがあった。心落

ち着かぬまま病院へと急ぎ聞いた

言葉は、余命半年。癌が六センチにもなり、数ヶ月後には腹水、黄疸症状も表れるだろうということだった。診察室を出てから、余命半年という言葉が心の中でリフレインする。主人に話し、残された時間を一緒に今までどおり過ごすことに決めた。よく主人と三人でお茶を飲んだ。たまに娘たちもまじえて。そんなある日、「エツちゃん人は人を幸せにする顔だね」と言ってくれた。何よりの言葉だった。認知症の進行と肝臓の病のせいかな、だんだん言葉の数も少なくな

つていた時だったから余計に嬉しかった。

私もできるだけ言葉をかけてるようにしよう。心は生きてるのだから。「お義母さんがいるからみんなもいいのよ。」時に、「健男さんにしあわせにしてもらいました。」そう言うと姑は本当に嬉しそうになつこりと笑った。私たちがしてあげられる事は側にいることだった。車椅子を押す主人の後ろから、「いい息子を持つて幸せね。」と言うと、「感謝しています。」と微笑んでいた。その顔が今でも目に浮かぶ。

気丈夫で我慢強い姑は、亡くなる十

日前まで私たちとお茶を飲んだ。何の手もとることなく安らかに逝った。折しも先に亡くなった舅の誕生日の朝に。病弱だった人に八十一才の寿命があつて本当によかつた。



僕と神戸

柴小路秀麿

「ああ、神戸の空気を吸いたいな。」
退職し、あこがれの京都で隠遁^{いんとん}生活を送る僕だが、鴨川をランニングしながらふとこう思う。

歩けば山にあたり、振り向けば海を望む、坂の町、神戸に生まれ育った僕は、明石市に奉職し、縁あって二十年間程は、明石の西方に居を構えたが、その間、山の乏しい播州の扁平な土地柄にはどうしても馴染めず、神戸への恋慕を

断ち切れぬまま、結局は京都に移り住んだ。

そんな僕がまだ現役の時、決まって週末には神戸まで足を伸ばし、一週間溜まった教育臭を洗い流したものだ。土曜の午後（その頃は週六日制）ともなると、陸上部の練習は早めに切り上げ、職場から解放され、と言っても、部活動や教育研究に異常に熱心な一部の先生方に、多少の後ろめたさを感じつつ、いつまでも学校を立ち去ろうとしない生徒達に笑顔を振りまきながら学校を脱出し、自宅とは逆方向の電車に飛び乗

つたものである。

電車が垂水の辺りを過ぎ、左手（北側）に山が迫り、右手に須磨の海が開けてくると、神戸の空気の浄化作用がはたらいで、僕はもう仕事のことなど忘れてしまうのだった。

神戸に向かう電車の中でのこんな感覚は、今、京都からやって来る時も全く同じである。電車が武庫川の橋梁を越える辺りから、右手（北側）の車窓に六甲の山並みが徐々に迫ってくると、「ああ、神戸の空気だ。」と、実感する。

JRは神戸の町を東西に貫き、その

間、北の窓には常に六甲の山並みを映し、南の窓には海の香りを漂わせながら走っている。東から入る電車は「三宮駅」に着くが、僕は次の「元町駅」で降りることにしている。三宮の駅前は、あまりに繁華で若者が氾濫し、騒々しくていやなのだ。その点、元町駅周辺は、旧居留地の面影を残し、大人の香りがして心も安らぐのだ。

駅を出た僕がまず行くのは、駅を少し南に下った所にある喫茶店、「E」である。そこで僕は三十年來の儀式に取りかかる。それは、昭和の臭いが残るこの

喫茶店の片隅に席を取り、まろやかなコーヒーをすすりながら、ゆつくりと煙草をくゆらすことで、この行為に僕は若い頃から執着し続けている。最近は煙草の量も減った僕だが、この幸せな一時を演出するための小道具である愛用のライターは今でも手離せないでいる。

禁煙流行りの昨今、煙草の吸えない

喫茶店が横行する中、この店の女主人に、「いずれこの店も禁煙になるのかなあ？」と、尋ねたことがあつたが、「そんな事、絶対にせえへん、喫茶店は煙草を吸うとこやで。」と、何とも心強い言葉

が返ってきた。僕は決してスモーカーではない。ただ、この煙草をくゆらすという行為そのものに、一つの「文化」を感じつついるだけなのだ。煙草を手にした太宰治や川端康成、実に絵になるではないか……。それはともかく、この店での儀式は当分続けられそうであれしい限りである。

さて、小春日和に誘われて、神戸の町を確かめたくなると、僕は店を出て北へ、諏訪山公園まで坂を登りつめる。二、三十分も歩けば十分だ。登るにつれて、市街地の全貌が浮かび上がってくる。

公園のすぐ上には「ヴィナス・ブリッジ」という美しい歩道橋がカーブを描き、海に向かって突き出していて、そこから神戸の町を一望することが出来る。山からの眺めといつても、あまりに町に近く、町の息吹と人々の生活の臭いが届いてくるようだ。

六甲の山は衣の裾を海まで垂らして横たわる。そのなだらかな裾はい上がるように町が開け、そのひだの如く坂道がのびている。

この坂の高みから眺めたときの印象が、神戸の町の魅力を語り尽くしている。

町全体が海に向かっていることが、町の雰囲気をも明るく解放的なものにしていくのだ。反面、京都や金沢の町における、日本的な陰翳美いんえいびは欠如しているかもしれない。とにかく、この地形が僕を含め、神戸人の気質にも大きく影響していると思う。

震災後も成長し続ける町の姿をしつかりとまがた瞋まがたに刻みこんだ僕は、諏訪山をゆつくりと東へ下り、異人館の散在する北野町へと足を運ぶ。

昭和七年、堀辰雄ほりたつおは神戸を訪れ、この辺りの異人館に大そう心を奪われ

た。作品「旅の絵」の中で次のように描写している。

「大概の家の壁が草色に塗られそれがほとんど一様に褪めかかつてゐる。さうしてどれもこれもお揃いの鎧戸が、或ひはなれば開かれ、或ひは閉ざされてゐる、多くの庭園には、大粒の黄いろい果実を簇がらせた柑橘類や紅い花をつけた山茶花などが植わつてゐたが、それが曇つた大空と草いろの鎧扉と、不思議によく調和してゐて、言ひやうもなく美しいのだ。」

この頃に比べるとこのような異人館の

数も少なくなつてはいるが、一帯はエキゾチックな雰囲気が漂つており、僕も若い頃、そのハイカラさに魅せられて、よく散策したものだ。ただ、NHKの「風見鶏」以来、町は急速に観光地として変貌をとげ、今や休日を問わず道は観光客であふれ、にわかづくりの土産物屋が軒を並べている。かつての散歩道は最早、僕の心を癒やしてくれる場所ではなくなつてしまつたのが残念である。

この北野町の喧噪を避けるように足早に坂道を下つて行く頃には、日も瀬戸内に傾きはじめる。神戸の空気で蘇

生せいした僕は、今買ったばかりのパンを抱
えながら、そろそろネオンの灯りだした
町の黄昏に、背を丸めるようにして溶け
込んで行くのである。

今、僕は京都に住んでいる。JRで一
時間あまりの距離だ。若い頃から酒の
苦手な僕に飲み友達などいようはずが
ない。その僕が月に一度は神戸にやつて
くる。馴染みの店でコーヒーを飲み、そ
していつものパンを買うために……。私
にとつて神戸は、「故郷はやや遠きにあ
りて通うもの」であるらしい。



神戸観光壁紙写真集より

来ひーん物語

大西生一朗

九月、僕は来賓として中学校の運動会にでかける。

今年で退職四年目になり、校長時代に在籍していた生徒はすべて卒業している。教師の顔ぶれも大きく変わったし、後任の校長先生も、来春にはご退職だ。

「今年で、もうやめていいかな……」

と、運動会を始めとした諸行事への参加を考えている。

来賓の資格は、前校長という極めて個人的なものである。僕の住む市では現在の所、五十五歳以上にならないと中学校の校長にはなれない。前・元校長の来賓は、「その学校で退職した者」と限定しても、在任期間

が二、三年くらいだから数は多い。

第二次大戦直後までならば、五十五歳で退職しても、寿命の平均がそれ以下だから、前や元校長は鬼籍に入っている人がほとんどだ。しかし、現在は数代以上前までお元気である。実際、来賓の参加者が一番多い「卒業式」になると、M中の場合、僕を入れて四名が来られる。しかも僕以外の三名は異動（転勤）の関係で、同い年の六十四歳。皆さんまだまだお元気で、お勤めなど社会参加をされている方もある。

前校長の僕と、元校長の三名、計四名が並ぶと、少し多い気がしないでもない。

それはさておき、一般的に式典や会合に招待された来客を丁寧ないう「来賓」は、その集会がどれだけの組織や人々に支援されているかというバロメーターでもある。公

的には非常に大切なことであるから、その人数や社会的地位が重視される。

「市長は、誰がお迎えにゆく?」

「秘書室が時間にお連れしてくれるそうです」

「では、教育長は」

「ご自分で来られるそうです」

「会長は」

「朝から来られます」

「議員はどうする」

「来られた方を日さんがチェックして、座席の指示もします」

僕が市の管理職時代に関係していたある団体の総会の準備風景である。市民会館で行う大規模なものだ。

総会の内容は勿論一番大切だが、一年に一度の定例の会である。まず紛糾する事

柄はない。

後は、壇上に座る主催者と、来賓の手配だ。

市・市教委・団体の共催であるから、市長、教育長、会長が主催者になる。しかし、この三者は来賓に近い。会の事務局が僕の属する市長部局の課で、実際の責任は課長。大きく見ても、せいぜい部長クラスまでである。

市長や教育長のお迎えは課長や係長という役職者の仕事だ。まあ、たいてい「十分前に行きます」とご自分で来られるケースが多い。

問題は来賓の、特に議員である。

国会・県会・市会の順である。地域の市会議員が多い。これは市民代表という意味だ。だが、誰が来られるか判らない。結婚式

などは来賓のための費用もかかるし、人のつながりだから出欠をとる。しかし、自治会や学校、組織の代表、市民の代表としての来賓で、しかも費用がかかるわけではない。どうしても出てもらわねばならない人は少ないから、「案内」は出すが、普通「出欠」はとりにくい。

議員となると、公用が多い。県会や国会議員は地元にいるとは限らない。

「まだか」

「もうおわりやな」

と開会十分くらい前までやきもきする。

もし国会議員が来られたら、来賓席の一番になるからだ。議員は国民・市民の代表だから、来賓のトップバッターになる。

十分前に締め切つて、座席の一覧に名前を記入して、壇上に案内する。その記録はコ

ピーを即座に司会者に渡す。

中学校の卒業式などは来賓紹介まで、卒業生の入場などで時間があるが、こういう団体の総会などでは、開会后すぐ紹介しなければならぬからである。

もし、来賓が壇上の座席に着き、その後誰かがギリギリに来られたら、司会者に「順不同でございませう」と、断りを入れて紹介してもらおう。これは例えば同じ議員であつても、座席や紹介は議員歴順・年齢順にしなければならぬからである。人間誰しも序列は気になるし、それがルールだからだ。

案内状の名前の記入、配付もれの気遣いから、当日の座席、接待、後日の礼状まで気を抜けない。

「あの人が出て、私が招待されないのは何

だ」というクレームも時にはある。

毎年くり返す総会だから、慣れていて内容的には漏れは少ないが、来賓の手配は毎回どつと疲れる作業だ。壇上のパイプ椅子でさえ、無造作には並べられない。空気が多すぎると、「この集会は出ても意味がないな」ととられる。また足りないとなると、「出たのに椅子もなく軽く見られた」「組織や市民の代表なのに」と、責任を問われる。

来賓の中には、「ワシは偉い」と、ふんぞり返っている人がいるので、若い職員の中には「なんでアンナ奴にそんなに気を使わんといかんのや」と感情的に怒る者もいる。

気持ちは分かるが、個人的資質はともかく、彼らは組織や市民の代表なのだ。

中学校の場合、来賓は、卒業式や入学式では序列が概ね決まっている。

PTA会長がトップなのは、生徒にとって最も大切な親の代表。

次いで行政の人が座る。行政の人がPTA会長に次ぐのは、学校の設置者であるからだ。つまり市民全体の代表と言うことになる。

都市部では学校数が多いので、教員委員会の指導主事たちが総出になる。足りないところは一般行政職で教育委員会に出向して総務課などにいる管理職が代行する。

教育委員会事務局の管理職は、退職する校長のいる学校に出掛けたり、伝統があるたり、経済的に豊かな地域の学校に出掛ける事が多い。

義務教育現場はヒラも管理職も、仕事は小学校か中学校かでストレスの度合いが異なる。その上、同じ校種でも学校間格差

は極めて大きい。だからであろうか、いわゆるいい学校に赴任する校長は、教育委員会事務局の上層部や、委員会の覚え目出度き校長先生がけつこういるようだ。で、委員会の上層部としてはそういう学校には出掛けやすいのかもしれない。

来賓派遣の手配をするヒラの指導主事は、頭を悩ますところである。毎年の記録を控え、一応、希望を聞いて配置していく。

尤も、保護者に見ても、また一般の教職員に見ても、誰が来ても、見たことも聞いたこともない人だから、余り意味はない。教育行政・管理職間だけのコップの中の嵐である。

一般の教職員が市の教育委員会の学校教育課長さえあまり知らないのは困ったものだ。しかし、採用は県教委、任命・異動も

県教委、そして給料も国と県からとなると、無理もないとも言える。

さて、PTA会長、行政代表ときて、議員が座る。国会・県会・市会の順である。それから現職の学校代表である。中学なら校区内の小学校、幼稚園の校長になる。幼稚園や小学校の儀式の場合は、中学の校区内に複数の幼小があるので、中学では管理職や学年主任などが手分けして出掛ける。この場合は、教育長が来た、次長が来たというほどの格差問題はない。

この後に続くのが、その中学校の元・前校長である。僕は前校長だが、M中では前述したとおり、その前の元校長のうち三人は同い年で、六十四歳になられるから、いつもこのお三方の顔をよく見る。

それから、学校に係わる地域の代表が続

く。クラブ振興会長、連合自治会長、公民館長、高齢者団体、女性団体、子ども会：。そして小学校の先生やPTAの役員となる。

卒業式には歴代の校長が来られることが多いが、運動会、入学式、学芸会とグントと少なくなる。

行事の中でも運動会は大変だ。九月下旬という、まだ日中の温度は三十度前後に達するし、砂埃も凄い。来賓も綱引きなどに参加する必要がある。

卒業式や入学式はせいぜい二時間もすれば解放されるが、運動会で九時の朝一番の入場行進から、三時頃の閉会式までいると、六十を超えた身には辛い。

少しだけいて帰るといって来賓が多い。

「かえろか」

「どうしよう」

「もう一つ見ようか」

と周りを伺い、席を立つタイミングを計る。

教育行政の代表で来る場合は、一日に、二、三カ所回るので席を立ちやすい。

「次がありますので」と校長に会釈して会場を後にすればよい。

（今日はここだけだが…）

（今日はここで、回るのは最後の所だが…）

と、僕の場合、些か自責の念に駆られつつも、早く帰る場合もある。

その学校に縁がある事は少ない。組織から派遣される義務であり、儀礼的に参加しているに過ぎないからだ。

だから、校長も「次はどこですか？」などと野暮なことは聞かない。

早く帰った時は、家で温和しくしておく。土日に出ても勤務ではないし、何の手当も出ないという不可思議な立場だが、「その場にいるだけで少しは教職員や生徒の励みになるかな」と思うからである。

もつとも、参加する中学校が荒れているときは、恥ずかしい話ながら、「どんな状況やらか」と興味半分で座り続けていたこともある。

今回、M中にとって、僕は前校長である。卒業式や歓送迎会などには退職校長がたくさん見えるのに、運動会は一人もないというのも淋しいだろうなど、自分で勝手に

そう思っただけで続けている。まあ、これもあんまりこだわることでもない。変にこだわると自分がしんどいし、他の人にも迷惑だ。出席できないこともあるし、病気のこともある。

第一、生徒も親にとつても知らない顔だから、テントの下に座っていても誰だか判らないだろう。

運動会は卒業式なんぞと異なり、来賓紹介はないし、席もバラバラである。

近いところに住んでいて、時間があるから参加してきた。しかし来年は、僕は「前校長」から「元校長」になる。もうそろそろ「消えゆく」ことにしよう。

設立集会

平成20年9月28日(日)午後2時

兵庫県学校厚生会

サンピア明石会議室 C

『アクトス』の設立集会を持った。9名のメンバーだが、6名が集まった。

5時までの予定で、今後の展開や、原稿の提出、締切など、賑やかに行った。

サンピアは明石駅から徒歩10分程度。

明石市役所の北に位置する。兵庫県学校厚生会の所管で、会員には割引がある。

今後も定例会場として使用予定だ。





10名程度の会議室というのはなかなかない。また大きくても構わないと思つたが、どこも既に予約済みが多い。改めて文化活動の多さに唸つた。結局、最初から考えていたここに落ち着いた。

終わつてから2次会を持つた。明石駅前の膳屋である。1名が帰られたが、新たに駆けつけてくれた仲間がいる。6名で、ワイワイと過ごした。大西は全員を一応存じ上げているが、相互には初対面という方が多い。立場や経歴、また文学歴も様々で、これから時間を掛けて知り合つていきたい。一年はかかると考えている。

3次会は男性のみ3名で、カラオケであつた。Uさんの歌のうまさは知っていたが、Jさんがプロ並みなのには驚いた。

設立集会・2次会に参加できなかった女性お二人は、21年1月の最初の例会ではお目にかかれそうである。



↑ 部屋の様子。お茶やお菓子の用意も依頼している。

因みに次回からは毎月第二土曜日の夜
6時から8時となる。2次会は可能ならば
少しでもやりたい。が、別に懇親会を持ちた
いと考えている。(生一朗)



〔柳歌〕

メタボの世紀

石川 柳歌

脂肪肝中性脂肪に皮下脂肪せつせと貯金はたまる一方(※)

(※) 運動をしているつもりのおじさんはシャワーの後にビールを一杯

枝豆にビール片手の野球の観戦せめて減らすかカロリー糖質

(※)

糖尿病父が来た道辿るいま国民病とてケーキをつまむ(※)

一センチオーバーですよと無情の声メタボでいいやと腹に手をやる(※)

いかなあタバコをやめんといかなあようし決めたぞ今日だけ
禁煙(※)

おお酒よアルコールよ我が友よ俺はお前を見捨てはしない

(※)

ボーナスで買ってきたぞと万歩計これで三つ目じつと腹見る(※)

歩行者の青い信号明滅し前に進まぬ体重呪う(※)

腹回り体脂肪量BMI減らぬ数値にストレス増える(※)

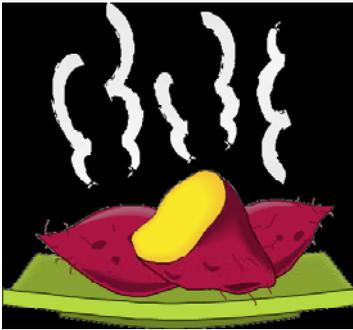
肥満体それが見せ場のタレントの踊るタップの痛々しさよ

がんはそれ生活習慣悪いのよ誰が名付けた個人責任

まあ一杯よせばいいのにまた一杯明日から我慢と今日もまた飲む

◎糖尿病が国民病だそうです。男性の二人に一人、女性の三人に一人はガンになります。(※)は、兵庫県歌人クラブ「年刊歌集」第48集(平成20年)より。

◎「柳歌」和歌の韻を踏んだユーモア・風刺・諧謔を中心にひたむきに生きる人生。人情を読む短詞型。石川柳歌による。



◆往復書簡―ご返事

明達光輝より

こちらこそ、有難うございました。随筆頑張つてください。

「読者の6割が理解できなければ意味がない」という言葉は、一般論です。

読者層を限定した小説はありますし、『分かる人だけに読まれればいい』という考えもあります。

ただ、現代の一般読者（新聞が読めて、ほぼ理解できるといふ知的基準）を対象として書くものであるならば、最低6割は理解できる必要がある、という意味です。

もちろん『アクトス』は、そう言うものに縛られる必要はありません。しかし、『アクトス』は、たくさんの人に読んでもらって喜び楽しんでもらえることが、大切な要素の一つです。文芸集団です。

いろいろな作品があつていいのですが、理解できない作品ばかりになるのは困りますから、もしそうなりそうならば僕の方で取捨選択します。

文章を書くことによる自己実現・楽しみ。それが同時に一般の人にも楽しんでもらえる、「読んでもらえる」ということが最も大切です。いま我々が取り組んでいる文学は自他への知的な楽しみなのです。日記と文学の差はそこにあるとほくは書きました。

論文と文学の差もそこにあります。あくまで事実（真実ではない）を積み重ねて論考・仮説を立てたものが論文です。変な論文は引用ばかり多くて、自分の説がないものも出てきます。

文学は事実を下敷きにして、あるいはまったくの空想で、あるいはその混合物として生まれまゝです。「アクトスの発起会に出るまでは『多くの人に理解されなくてよい。少数の人が理解してくれば』と自己満足しておりました。」メールではこのように言われており、ホツとしました。

自己満足では、困ります。

僕も人に著作をあげますが「よかった」「おもしろかった」と言つて頂けます。それは礼儀です。もし、それほど素晴らしく感動し、良かったならば、他人に勧め、自分でも購入します。「次はいつ出るのどこで手に入るの」ということになるでしょう。

一回買つても、面白くなければ、二回目はありません。著作をもらつても「困つたな」と思いません。「素晴らしい」「よく勉強している」「おもしろかった」というのは百%、儀礼的なほめ言葉と覚悟する方がいいでしょう。

本当の評価をしてもらう事は辛いことです。しかし、そこからなにくそと、反省し書き続けることが大切です。

あれだけの文章を書けるのですから、それは凄いことなのです。但し、プロの目から見ればまだまだ甘いものだと思います。お互いにしっかりと研鑽していきましょう。それは楽しく、厳しくです。メールをいただいたことは感謝しています。できれば、まず、自分の作品に対する指摘・疑問・

質問は、その場で（前回は時間がありませんでしたが）解決する方がいいですね。次回からゆっくりとやりましょう。

「後からの追加」

過日、僕の先輩の先生と話しました。大江健三郎先生はノーベル文学賞をとられた偉大な方です。しかし、難しい作品です。一方、神戸新聞（全国の地方紙）で掲載の始まった『親鸞』を書かれている五木寛之先生の作品は、史的な事実を踏まえつつ、楽しく読めます。ふりがなはそこら中に振られています。僕たちが目指しているのは後者の創作活動です。もちろん大江健三郎先生スタイルを否定するものではありません。

★【ペンネームをつけようかという方に】　メールのお返事に加筆しました。

ペンネーム、考えて下さい。

いろいろ作って、寝かせて、見直すと良いものが出来ますよ。

ペンネームは、仮名で書くことで、自由な表現が出来るという利点があります。本名を出すことのリスクを避けるためもあります。同時に、別人としての思考ができるという点も。

本名で活躍している人も多いですが、女性なのに男性名をつけたり、夢枕獭さんなんていう、おもしろいものもあります。文豪、二葉亭四迷の、「父に『くたばつてしまえ』と言われた」ので、ダジャレでつけたものは有名です。江戸川乱歩も「エドガー・アラン・ポー」という作家の名前をもじった

ものです。一人で複数の名を持つ人もたくさんいます。芥川龍之介なんかもそうです。一種、遊びの感もありますねえ。

絵や俳句や尺八や、踊りにも、雅号・俳号など、ペンネームと同じ働きのものがあります。

作家は、①本名で生きる。②ペンネームで生きる。③作品の主人公で生きる。ことが出来るそうですが、②と③は作るほど多くなります。人生をやり直したり、別の世界に生きたり、考えてみると面白いものです。では、良い筆名(ペンネーム)と作品を。

「アクトス賞」について

設立集会でご案内しました標記の賞について、『アクトス』誌2号ごとに(概ね一年ごとに)授与したいと考えています。

会員投票を行いますので、作品を読まれた後、該当するものを各自、各号5点程度選んでおいて下さい。(明達光輝作品は除く)

散文(小説・随筆・紀行など)や詩は、一編を1点とします。短歌などは一首を1点としても構いません。

「アクトス賞」は賞状・記念品と金一封。次点2作品を「奨励賞」として、賞状・記念品を授与します。選考は会員選考を参考にし、会長が決めます。

〔朝日新聞―天声新語より〕

「後期高齢者」と呼ばれる年齢が近づいてくると、昔の友人や同僚たちとの交流も薄らいでくる。自然の成り行きとはいえ寂しい。その孤独感を払拭してくれるのが趣味である。私の場合は囲碁▼碁会所に行くと、色々な人に出会えて面白い。だが、不愉快な思いをする人とは、席料を払ってまで打ちたくないのが本音である。ルールやエチケットを無視する人。タバコを吸う人。やたら勝ちたがる人。落ち着きがなく、お喋りな人。そんな人との私の対戦成績はきわめて悪い▼何故か。色々と思いを巡らしているうちに気がついた。その原因は私が「人」を相手に碁を打っているからだ、と。そうではなく、私は「神」と打つように心掛けねばならないのだ▼無限の手段を持つ囲碁の奥行きは、宇宙のように広く、深い。到底人智では解明できないゲームである。私の目の前にいる相手は、囲碁を司る全知全能の神が色々な人間に身を変えて、私の技量や人間性を試しに来ているのだ▼そう思うと、私は自分の打つ手に最善を尽くせばそれでよく、今までは嫌らしかった相手にも好感が湧いてきた。そして、良い相手

とは一層親しくつきあえるようになった。勝率も向上した▼今日も、どんな相手と手談(囲碁を打つこと)ができるだろう、と胸を弾ませながら碁会所に向かう。「よくも飽きずにご熱心なこと」と笑う女房を背にして。友人とは、できるのではなく、つくるものだ、と、この歳になつて改めて囲碁から教えられた。

Ⅱ 横浜市、西田昭良(74)

※良い文章を、と考えていると、『天声新語』の入選作にであつた。なるほど、と納得しつつ眺めた。起承転結(序破急)の構成もいいし、文は短く要を得ている。なにより内容が良い。置き換えてみる。「文学の無限の奥行き」「自分の文章に最善を尽くす」「友人はつくる」のだ。とはいえ、総てしんどいことなのだが、やり始めると楽しんでいて自分に気がついた。それが大切なのかも知れない。

文芸集団 **Actos** - アクトス2008 - [Kobe-Akashi]

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。それは、事実の伝達のみでなく人の情感を伝えるものであり、ここに文学は誕生する。「心を動かす」という意味において「文学は文案」であり、そのための「芸術」といえる。

本会は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努める。ために、楽しくも苦しい創作活動と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス集団の活動でありたいと願う。

- ◆あらゆるジャンルの書くこと。
- ◆『アクトス誌』を年二回発刊。
- ◆月一度の例会(合評会)。
- ◆懇親会・旅行。
- ◆アクトス賞の創設。
- ◆会費(アクトス誌年2回各2冊含む) 月額1000円
例会費1000円 (出席の場合のみ。部屋・茶菓代等)



- ◆ワープロによるデジタルデータをインターネットメールに添付しての提出が原則です。出来ない方はご相談ください。
- ◆例会に参加できないと言う方は、ネットまたは 携帯メールのみでの参加も可能です。

神戸・明石が中心です。京都からの同人もいます。「書いたことはないが書きたい」「活動に興味がある」というだけでも構いません。多く読み、多く書き、他人に読めるものにするには、- 他人の批評を受ける - ことが大切です。創作は孤独ですが、一人では向上・継続は難しいものです。気軽にご参加下さい。

詳細は下記まで、メール(携帯からのメールも可)、FAX、電話等でお問い合わせ下さい。毎月第2土曜日午後6時から2時間例会をもちます。楽しく、楽しく、楽しく、自由に研鑽しあう会です。「和」を大切にしたいと思います。ネットによる参加もできます。

- 代表: **明達光輝** -

actos2008@mbe.nifty.com:Tel&Fax 078-922-4562

〔短歌〕

秋の灯に書物開きて息をつき眼鏡引き寄せ式部と話す

秋の恋スタンダールの本の海鈴虫鳴いて我にぞ返る

明達光輝

◆編集について

※字の大きさは編集の方で、収まるように配置します。従って、「小さくなる」場合や「大きくなる」場合、二段に
なったりする時もあります。次号以下に繰り越す事も出てきます。また、掲載の順序なども、順不同で、編集が
適宜配置します。

※一回分は概ね最大2000字程度(400字詰め5枚)としますが、内容・提出数などによって、変更します。
原則、一ジャンル一作品。複数ジャンル(複数作品)も可です。但し、編集によって掲載の可否は判断します。

※原稿は原則デジタルデータとします。返却しません。紙原稿の場合も大きな活字で印字してお送り下さい。
万一、手書きの場合も含め、短いものになります。 ※総てコピーをおとりの上提出下さい。

※カットは、書かれる方があれば、カラー・白黒を問わず使用します。ただ、大きさや配置については一任して
いただきます。また印刷は家庭用プリンターで紙質も良くないのをご了承下さい。写真も同じです。返却
しません。コピーをおとりの上提出下さい。また、出来る限りデジタルデータ、jpg・gifと言った形式で提出
下さい。

※校正は原則行わず。いただいたものはそのまま掲載します。協議の必要があるものは大西と著者で行いま

◆司会者について

平成21年

1月浜田 2月今井 3月瓜生 4月小川 5月柴田 6月佐藤(俊)

7月佐藤(由) 8月土谷 9月浜田 10月今井 11月瓜生 12月小川

平成22年

1月柴田 2月佐藤(俊) 3月佐藤(由) 4月土谷

※以後ローテーション、都合が悪い場合は適宜各自で交渉して交代。新入会員は随時入れて行きます。

◆第2回は2／14(土)、第3回は3／14(土)です。

以後も第二土曜日の予定です。出欠のご連絡は不要です。

※参加希望の方は奥付編集室までご連絡下さい。詳細をご案内します。

※アクトスのHPは、<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

※アクトスの携帯電話用HPは、<http://www.justmystage.com/home/actos2008/Top.htm>

「携帯電話でアクトスHPー携帯用画面ーを見ることが出来ます。」

※アクトスは「行動する人」の意。



編集室から

・九月の立ち上げのための集会に出す必要があつたので創刊号の大体の体裁は八月に完成していた。その後、時間を見ては、内容を書き加え、削りという作業をくり返している。雑誌のスタイルは一応決まったら暫くはそれで行くことになる。

「毎回変化したら面白いのでは」と考えないこともない。しかし、作り手にも読み手にも安定性に欠ける。第一、作る手間がもの凄く大変である。

そんなわけで、最初の号は試行錯誤の連続だ。冊子作りや編集は、手作り随筆集や本などで、相当慣れてはいるが、まさに悪戦苦闘である。

——並行してHP（ホームページ）も作成した。十年前から童話のHPを持つ

ているが、こちらはストップした。些かマンネリ化していたこともあるが、更新に追われて手が回らなくなつた。それにかわつてアクトスのHPである。携帯電話用のものも作つた。今回はHTMLというホームページ作成言語を触ることもなく、専用ソフトを利用。考えていたより短時間ですんだ。覗いてみて欲しい。

・六月から軽登山をしている。せいぜい三、四百メートルほどの里山に登る。先輩のK先生に誘われて始めたのだが、はまつてしまった。

リュックに運動靴、ットポトルにコンビおむすびで良い。肥満体は登山に向かないと昔から思い込んでいたのだが、マイペースで登れば可能だ。

面白いので、軽登山靴、軽登山用リ

ュック、杖、時計、機能性下着、山頂での湯沸かし道具と買い込んで、なにやら様になつてきた。

三回目からは妻と出かけて、彼女は「ハイキング」とウキウキしている。編集という役割は、なかなかのものである。これで食べているなら、作者と何度もやりとりするのだからうけれども、そつ言つわけにはいかない。

原稿に明らかな間違いを見つけたら訂正するし、読みやすく段落を整えたりもする。といつても、作者が故意にと言うケースもある。判断がつきにくくても、『最終稿を送付いただいて、そのまま掲載』が原則だ。メールで「添削を」と言つてくたされれば可能な限りお受けしている。編集の、いづれその具体例をお見せしたいと思う。「生一朗」

◆合評会ー毎月第二土曜日

午後六時 から 八時。

◆場所 サンピア明石

〒673-0882

明石市相生町2丁目9番20号

TEL (078) 911-2250(代表)

FAX (078) 913-1140

JR・山電明石駅から南東へ徒歩約10分

市バス「保健センター前」下車すぐ

立体駐車場有(有料)

アクトス 創刊号

平成二十一年一月一日

編集 大西生一朗

発行

673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社 「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)500円
